１学期終業式校長講話
令和７年７月 18 日（金）
校長 佐藤明子

１学期を終えるにあたり

皆さん、１学期間の学びと歩みを経て、今日、終業式を迎えました。こうして全学年が揃ってこの日を迎えられることに、心よりの安堵と喜びを感じます。春、新たな学年や環境に胸を高鳴らせつつも、少なからず不安や戸惑いを抱いて登校してきた皆さんが、日々を誠実に過ごし、互いに支え合いながら、時間を重ねてきたことに私は、その一人ひとりの姿に誇りを抱いています。

さて、校長室の前に置かれた『大ピンチずかん』という絵本を知っていますか。
〇 牛乳をこぼした瞬間、声も動きも奪われてしまった少年
〇 体育の授業でルールが分からず、ひとり取り残される子　等々
ふとした言葉が友人を傷つけ、心に静かな後悔が残る場面ーそうした“小さな大事件”を、ユーモアと慈しみの眼差しで綴った作品です。日常に潜む“ピンチ”の深刻度やなりやすさといった要素が、図鑑のように記されています。そこには、「失敗を怖れない心」「戸惑いを見つめ直す勇気」そして「人の痛みに共感する優しさ」が描かれています。
私はこの本を、校長室の前にそっと置きました。それは、ただ本を紹介したかったからではありません。皆さんの目に触れる場所に、あえてこの本を置くことで、こう問いかけたかったのです。
「あなたの中にも、ピンチずかんはありますか」
「そのページを、笑いとともにめくることができていますか」
時々、本の前で立ち止まり、ページをめくる皆さんの姿を見ますが、そのたびに私は皆さんの心へ、語りかけます。
「あなたの経験は、きっと誰かの力になる、自分の力になる」
「その今の気持ちを、どうか丁寧にしまっておいてほしい」
「いつかその気持ちが、あなたを成長させてくれる」　　と。

ピンチとは、成長の通過点に現れる“立ち止まりの風景”です。そこにこそ、人の心は育まれ、自らを知る契機となります。そして、自らの弱さに向き合えた者こそが、他者の痛みに寄り添う力を持ちます。皆さんの１学期は、まさしくそうした“心の旅路”だったのではないでしょうか。大切なのは、うまくできたかどうかではなく、向き合ったその姿勢です。

これから迎える夏休み。
どうか、自身の「ピンチずかん」の続きを、自由に描いてください。自由な時間の中に学びを見いだし、悩みの中に気づきを得て、ありのままの自分で過ごすひとときを、心から大切にしてほしいと思います。
とはいっても、何よりも大切なのは、健康と安全です。学校だよりにも詳しく、触れましたが、夏休み明けには、心と身体のバランスを崩して、学校のようなたくさんの人が集まる場所に行きたくなくなったり、そもそも人に会うのが苦しくなったりするような、症状が出る人がいます。これは、決して恥ずかしいことではありません。もし、不安を感じた時には、遠慮なく、近くの大人に相談しましょう。家の方でもいいですし、学校には先生もいます。また、相談を受けてくれる窓口の案内も、今日、配布します。自分の気持ちを、他の人に話すだけでも、心は軽くなります。活用して、ひとりで辛いことを抱えないでくださいね。９月１日、ここにいる全員が、元気に登校し、新しい２学期のスタートを切れることを期待しています。
そして、ちょっぴり心も体も伸長した皆さんが、この貫井中学校の学び舎に戻ってくることを、私は心より、楽しみにしています。